

「地球環境と国際環境」あるいは「地球科学と国際社会」、まったく異なる分野のように思えてしまうが環境動態という視点からは同じ事象といえる。このような環境の時空変化を理解するための基礎づくりをこの授業の目標とする。

学生の学習目標 / Prerequisites

この講義における学生の学習目標を「時間と空間の中におけるさまざまな環境の動的な変化の実態を理解する」とする。

まず「環境」ということばについて漠然とでもいいから考えてもらいたい。きみにとって、つまりきみ個人を主体に決めたい、環境とはどう定義することができるだろうか。教室で授業を受けているとしよう。椅子に座っているはずだ。目の前にはノートや筆記用具などが置かれた机がある。まわりには友人や見知らぬ学生たちがいる。目を上げれば黒板や教員の姿があるだろうし、黒板に書かれた文字はちょっと油断するといつのまにか増えている。教室の中は寒いかもかもしれない。このさまざまなものすべてがきみにとっての環境になる。

では、バス通学のときを考えたらどうだろう。バスの中にはシートがたくさんあり、揺れるつり革があり、運転手さんやきみと同じように大学へ向かう学生たちの姿がある。窓の外では景色が刻々とうつり変わっていく。では家に帰ったら、旅行にでたら、もしもそれが海外だったら…。主体がかわらなくてもそれがおかれた場所や状況によって、定義される環境がおおきく異なることが理解できると思う。しかもそれらは空間的に切りはなせるものではないし、時間とともに連続的に変化するものでもある。バスからおりてバス停に立ってもバスはまだ環境の一部としてきみのうしろにある。

場面を教室に戻そう。つまらない授業だったとしよう。友人があくびをしたらきみもそれにつられるかもしれない。次の授業の予習をきみがこっそり始めたら、友人がまねをするかもしれない。そんな行為を先生が怒鳴りつけたら教室のほぼ全員がしゃきっとするだろうし、それで先生は機嫌をなおすかもしれない。環境が主体に影響を与え、主体もまた環境に影響を与える。主体と環境との相互関係がこれで理解できるだろう。

自然環境を考えるにも国際社会での事象をとりあつかうにもこれと同じことがいえるだろう。ある一定の空間である生物種が増え続けてしまったら、ほかの種はその圧力で時間とともに減少し続けることになる。全滅を避けるにはその空間の外へ移動しなければならなくなる。あるいはその種に対抗できるように変化する必要がある。空間と時間とがあってその中にはさまざまな主体がある。空間はとぎれることなく広がり時間は刻々と進んでいく。その中でさまざまな主体が活動し他へ影響を与え他から影響をうけながら変化していく。

概念ばかりを説いてしまったが、自然や国際社会などのすべてをこのような空間と時間の中でとらえてもらいたいと思う。「環境」ということばが明確な定義なく自分勝手にかつ都合よく使われすぎていると感じる。環境という便利なことばを口にする前に、その意味や定義をきちんと認識してもらいたい。環境について考える糸口を得ることをこの講義の学習目標にもしたい。

授業の概要 / Outline

この授業では自然と国際社会について、いくつかの実例を担当者のこれまでの調査活動などに題材をとりながら進めていく。具体的には以下を予定している。

1. 「環境動態学」とは何か: 「環境」とはなにか、「動態」とはどのようなものかについて説明し、時間と空間の中で環境をとらえるという考え方を解説する。
2. カンボジアのトンレサップ湖(1. その形成と変遷史): 東南アジア最大の湖であり世界でも最高の生物多様性をもつとされるこの湖について、誕生した理由や、5500年前の大変化、現在の自然、そして今後の変化などについて、この湖の歴史を地球環境の変化の中でとらえ説明する。
3. カンボジアのトンレサップ湖(2. 生物多様性と地域住民): トンレサップ湖はカンボジアの社会や文化を支えてきたといってもよいほどの存在である。この湖がほこる生物多様性やそれが維持されるしくみについて、その中で地域住民の活動や生活、そして住民活動が生態系へ与えるインパクトについて解説する。
4. アンコール遺跡群(1. クメール文明とアンコール遺跡): 世界遺産の白眉ともいえるアンコール遺跡はかつてカンボジアの地に栄えたクメール文明が残した寺院や王宮などの複合体である。アンコールワットに代表される遺跡の概要をのべたうえで、その当時の社会構造、とくに農業生産を支えた水管理などについて解説する。
5. アンコール遺跡群(2. 観光産業と環境破壊): 押しよせる観光客とそれをめあてに暴走する観光産業によって遺跡では環境汚染が顕在化している。この過程を社会構造の変化とあわせて説明し、開発と保全という両側面からみた環境問題について考えてもらう。
6. 東南アジアのマングローブ林: 熱帯の遠浅の海岸のみに生育するこの森林は地球環境の変化とともにその立地条件を変化させてきた。このマングローブ林の重要性とその変化について説明するとともに、開発によって次々と消滅するマングローブ林の実態について解説する。
7. スマトラ-アングマン津波: 2004年12月のスマトラ大地震によって引き起こされた大津波はインド洋各地に破壊的な被害をもたらした。タイの南海岸もこの津波による被害を被ったが、濃密なマングローブ林がこの被害を低減させた地域もある。スマトラ大地震津波について、また、津波とマングローブ林、そして地域社会との関連について解説する。
8. 日本海の海洋環境: 日本海は閉鎖性の高さゆえに地球環境の変化を微妙に反映するという特異な性質をもっている。地球全体が低温下した約2万年前の最終氷期最大期から、地球が温暖化した現在にいたるまでの日本海の海洋環境の変化を説明し、それをふまえて現在の日本海の海洋環境と今後予測される変化について講義する。
9. 北陸地方の地質: 北陸地方は年間とおしての湿潤な気候や冬の豪雪などで知られる。また、ここには日本海が形成された約2000万年前からいまにいたるまでの環境変化が地層の中に記録として残されている。北陸の地域地質史について日本海の形成史とあわせて説明し、その中で現在を位置づけることを試みる。
10. 西南日本太平洋側の地質: 太平洋・フィリピン海両プレートが本州弧の下に沈み込む位置にある太平洋側は、巨大地震の周期的な発生で歴史時代から現在にいたるまで壊滅的な被害を何度もこうむってきた。しかし、見方を変えれば日本列島は大陸プレートと海洋プレートのせめぎ合いの中でうまれてきたともいえる。日本列島の形成史を西南日本太平洋側の例をもちいて説明する。
11. 英国ウェールズ地方の地質: 近代地質学の発祥の地であるウェールズ地方に題材をとりながら、地球上の生命の誕生からその爆発事件、そしていくたびとあった大量絶滅事件について解説し、地球における生命とその変化について無機的環境との相互関係をふまえながら説明する。さらに、人類が偶然にも誕生したいきさつやその現在にいたる進化と特殊化についてもふれる予定である。
12. フランスのジュラ山脈の地質: 時代名ともなっているフランスのジュラ山脈は、かつて北上を続けたアフリカ大陸がヨーロッパ大陸と衝突したことで形成された褶曲山地である。同じような事例はインド亜大陸とユーラシア大陸によるヒマラヤ山脈の形成がある。ジュラ山脈の地質に題材をとり、大陸の移動が地球環境に与える影響について解説し、約1億年先の地球環境について考える材料を提供する。

13～15.まとめ:これまでにすすめてきた自然環境や国際社会にかかる事例をとりまとめ, これらをひとくりにした「環境動態」について, 履修生全員とあらためて考えなおす回とする.

評価の方法 / Grading Method

成績評価: 次項の項目及び割合で総合評価し, 次のとおり判定する。
「S(達成度90%～100%)」、「A(同80%～90%未満)」、
「B(同70%～80%未満)」、「C(同60%～70%未満)」を合格とし、
「不可(同60%未満)」を不合格とする。(標準評価方法)

評価の割合 / Grading Criteria

学期末試験	30%
レポート	20%
出席状況	50%

テキスト・教材・参考書等 / Teaching Materials

図書館トップページへリンク

テキストは使用しない。授業を進めるにあたって必要な資料はプリントで配布する。また, 副読本などはそのつど授業で指示する。

その他履修上の注意事項や学習上の助言 / Others

この授業では予習と復習とをしっかりとやってもらいたい。ただし, 予習や復習といっても机に向かったのものではない。常日頃から自分の身の回りの自然をよくながめる習慣をつけておくこと。これがこの授業の予習と復習になる。

オフィスアワー等(学生からの質問への対応方法等) / Consultation Time

いつでも対応するが, 事前に電子メール(tukawaki@t.kanazawa-u.ac.jp)か電話(076-264-5814)かで事前に日時などの約束をとっておくことがのぞましい。

受講者数調整の方法 / Method for adjusting class size

抽選

開放科目 / Subject of open

国際学類 国際社会論特論A 2
総合教育棟

特記事項 / Special note

×閉じる